

目的 現代社会では生活する上で、いくつかの集団に属し様々な役割を演じることが求められる。服装とは自己表現の手段であり、たとえ無意識であっても何らかの意味を見る側に伝えるものだが、このような社会の中で着る側がどのような意味を伝えるかは、その人の持つ生活領域の中での場の解釈が表われてくるのではないか。本研究では、職業を持つ女性と無職女性について、いくつかの場面の着装基準を調べた結果より、社会的役割を服装で伝達する効果をどのようなとき期待するのか、又、それに反発あるいは放棄するのはどのようなときかなどの考察を試みた。

方法 20～60代までの有職女性106名及び無職女性57名を対象に昭和59年10月、各生活場面（職場、通勤、家庭、街、おけいこ事や市民活動の場）での着装基準について、14～16項目を7段階評定で評価してもらった。結果は、場面別にみた平均値、単純集計と因子得点より検討した。

結果 ①無職女性は、比較的どの場も一般的な他者の目を意識した印象操作がみられ、家庭の場においても服装で社会人らしさや役割を示す効果を意識している点が、有職女性と異なった。しかし、家族に対する印象を考慮するか否かは両者共にばらつきがあり、子供の有無や年齢で異なった。②有職女性は、服装より相互理解を示す場としてまず職場があげられるが、他の場では他者の期待する役割をくずしたい、他者との関係を変えたいという意識がみられた。③着装意識の結果から、お互いの関係が不明確な場合に、服装という伝達手段でそれを補助したい気持ちが見られた。